

世界の水資源事情

(2)

佐々木茂子

「10世紀の戦争が石油をめぐるものであったとしたら、21世紀の戦争は水をめぐるものになるだろう」とは一九九五年当時世界銀行の副総裁であったイスマイル・セラゲルディンの言葉であるが、今や世界は深刻な水のストレスを受けている。

世界人口の約五分の一にあたる人々は安全な飲用水を供給されず、途上国での乳幼児の死亡原因の多くは飲用水に起因する疾病によるものである。水資源に関する図書は多数出版されており、いずれも世界各地で進行している淡水資源の枯渇、頻発する洪水、水質汚染、国際河川をめぐる紛争等について詳細に報告しているが、その論点や解決に向けての提案は錯綜している。

国連「世界淡水年」に当たる昨年三月、日本で第三回世界水フォーラムが開催された。同会議の詳細はウエブサイト上で公開されている

(<http://www.worldwater-forum3.com>)。

第三回世界水フォーラム監修「世界の水と日本」(水資源協会 100)

は世界の水問題に関する基本的な情報を様々な情報源から抽出したものである。このフォーラムのためにOEC(欧州経済委員会)が作成した資料が『世界の水質管理と環境保全』(明石書店 100)として刊行され、水の効率的・効果的な管理について、OECの様々なプロジェクトの成果と教訓を報告している。同時に閣僚級国際会議が開かれたが、そこでOECの主な議論と成果は水資源協会編『第三回世界水フォーラム閣僚級国際会議 その概要と成果』(山海堂 100)に収められている。

インドの環境学者で平和運動家のヴァンダナ・シヴァは「ウォーターワークス 水の私有化、汚染そして利益をめぐって」(緑風出版 2003)の中で水の私有化と企業による環境テロリズムを批判し、水問題の解決策として水の循環に取り組み、水の民主主義を創造するよう提唱している。インドのある乾燥地方では雨の最初の一滴に呼び名があり、またガンジス川には「108もとの名前」がつけられていることを本書によって知った。

水資源に恵まれたカナダで100万人の会員を持つNGO「カナダ人評議会」の議長モード・バー口はトニー・クラークとの共著『水 戦争の世紀』(集英社 100)で、水資源を社会の「コモンズ」

として保護し、各国内の条例や法律、国際法によって守るべきものだと主張する。その基本理念は「ワントン・コンセンサス」とは対極にあり、水資源をビジネスの対象にしたしたものである。このフォーラムのためにOECが作成した資料が『世界の水質管理と環境保全』(明石書店 100)として刊行され、水の効率的・効果的な管理について、OECの様々なプロジェクトの成果と教訓を報告している。同時に閣僚級国際会議が開かれたが、そこでOECの主な議論と成果は水資源協会編『第三回世界水フォーラム閣僚級国際会議 その概要と成果』(山海堂 100)に収められている。

一方、南アフリカで育ち現在はカナダに住むジャーナリスト、マルク・ド・ヴィリエは「ウォーターワークス 世界水戦争」(共同通信社 100)で水そのものについての基本的な性質や循環の仕組み、また世界各地の水系の歴史的背景や水紛争について教えてくれる。著者によると、水問題はごく普通の人々の日常の行動の結果であり、人間の創意によって水戦争を防ぐことができると言つて水戦争を防ぐことができると言つた。

高橋裕著「地球の水が危ない」(岩波書店 100)では水問題は人々が水との関係を軽視した結果生じた構造的課題と指摘する。ダムを始めとする水資源開発に関しては、水またはエネルギーの需要動向、気象条件や地形特性など国により事情

が異なるので先進国の方針をそのまま押し付けるべきではないとする。また、日本が近代以降に経験してきた治水と水害、都市化、環境破壊などの歴史はモンスター・アジアの発展途上国にとって貴重な先例になるだろうと示唆する。

国際協力の視点から水をめぐる紛争とその予防・解決の過程、開発援助のあり方を論じるのは村上雅博著『水の世紀—貧困と紛争の平和的解決にむけて』(日本経済評論社 100)である。著者は安全な水の供給は国際社会が総力を挙げて取り組むべき最優先課題であると訴える。卷末のサイト集が参考になる。この他にも米国の安全保障の専門家マイケル・T・クレアがポスト冷戦時代における資源紛争について解説した『世界資源戦争』(廣済堂出版 100)や過熱する水ビジネスについて米国、中国、日本の現場を取材した中村靖彦著『ウォータービジネス』(岩波書店 100)、日本は独自の技術で水素資源立国を目指すべきとする浜田和幸著『ウォーターマネー／石油から水へ世界覇権戦争』(光文社 100)など水問題に关心を持つきっかけとなるだろう。

食糧の多くを海外に依存する日本は、大量の間接水を輸入していることになる。世界の水資源について無関心のままではいられない。

(えいき しげこ／アジア経済研究所図書館)